

指導資料

 鹿児島県総合教育センター

国語 第120号

— 高等学校・特別支援学校対象 —

平成 23 年 4 月発行

「国語総合」における短歌創作に関する 言語活動例の具体化の工夫

新学習指導要領の国語科では、「書くこと」の学習指導において、短歌を創作する言語活動例が、小学校、中学校及び高等学校を通して、次のように一貫して取り上げられている。

言語活動例（2内容 B(2)）	
小学校	第5学年及び第6学年 ア 経験したこと、想像したことなどを基に、詩や短歌、俳句をつくったり、物語や随筆などを書いたりすること。
中学校	第2学年 ア 表現の仕方を工夫して、詩歌をつくったり物語などを書いたりすること。
高等学校	国語総合 ア 情景や心情の描写を取り入れて、詩歌をつくったり随筆などを書いたりすること。

国語科教育における短歌を創作する言語活動については、系統的に行うことが求められていると考える。

そこで、本稿では、小学校から行われる系統的な学習であることを踏まえた上で、高等学校の「国語総合」における短歌創作の言語活動例を具体化する際の工夫について述べる。

1 短歌創作に関する言語活動例

学習指導要領解説国語編には、短歌創作に関する言語活動例について、次のように述べられている。

小学校においては、中学年で児童の思いを大切にしながら創造的な表現をすることの楽しさを実感させる。それを受けて、高学年

では身近な情景や生活の中での出来事をとらえ、伝統的な定型詩の特徴を生かした創作を行うことによって、七音五音を中心とする言葉の調子やリズムに親しませたり、凝縮した表現によって創作する楽しさを味わわせたりする。

中学校においては、身の回りの物事や体験、心の動きなどをとらえて創作させる。そのことは、生徒のものの見方や感性を豊かなものにすることにつながる。

高等学校においては、物事を見つめ、思考し、想像し、構想し、それを表現する活動の一層の充実が大切になる。そこで、情景や心情の描写を取り入れることが前提となる。生徒たちは、短歌を創作する活動を通して、語句の選択や表現の仕方を工夫したり、出来事や経験のもつ意味を問い直し、自らのもの見方、感じ方、考え方を見つめ直したり深めたりする。

以上のように、生活の中の伝統的な言語文化としての短歌については、自分の体験などを題材として思考、表現させることが大切である。短歌を創作する言語活動を指導する際には、次の2点に留意したい。

- ・ 伝統的な言語文化として指導すること
- ・ 学習の過程を踏まえて指導すること

2 短歌創作を指導する際の留意点

(1) 伝統的な言語文化として指導すること

高等学校国語科の目標には「言語文化に対する関心を高め」という記述があり、関心を高める対象が言語文化と明示されている。学習指導要領解説には、言語文化について、次の3点が述べられている。

- ・ 我が国の歴史の中で創造され、継承されてきた文化的に高い価値をもつ言語そのもの、つまり文化としての言語
- ・ それらを実際の生活で使用することで形成されてきた文化的な言語生活
- ・ 上代から現代までの各時代にわたって、表現、受容されてきた多様な言語芸術や芸能

今回の改訂では、小学校、中学校及び高等学校を通して、学習指導要領に〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕が設けられた。短歌については、小学校第3学年及び第4学年の「伝統的な言語文化に関する事項」に、「易しい文語調の短歌や俳句について、情景を思い浮かべたり、リズムを感じ取りながら音読や朗読をしたりすること」と述べられている。高等学校における目標は、小学校及び中学校を通して系統的に深めてきた「伝統的な言語文化」の理解を踏まえ、言語文化に対する関心を高めることである。

我が国の伝統的な定型詩である短歌は、五音あるいは七音の句を基本として構成されており、言葉の調子や美しいリズムを感得できる。また、上代からの各時代にわたって継承されてきており、実際の生活の中で文化として触れることができる。

そのような伝統的な言語文化としての

短歌は、他の人の作品を読んで凝縮された表現等について味わうようにすることも重要であるが、自分で創作するように指導することも大切である。実際に創作することで、短歌のよさの実感が深まることになる。

(2) 学習の過程を踏まえて指導すること

高等学校国語科「国語総合」の「書くこと」の指導事項は、次のア～エである。

題材選定・取材・表現の工夫	ア 相手や目的に応じて題材を選び、文章の形態や文体、語句などを工夫して書くこと。
構成	イ 論理の構成や展開を工夫し、論拠に基づいて自分の考えを文章にまとめること。
記述	ウ 対象を明確に説明したり描写したりするなど、適切な表現の仕方を考えて書くこと。
推敲・交流・評価	エ 優れた表現に接してその条件を考えたり、書いた文章について自己評価や相互評価を行ったりして、自分の表現に役立てるとともに、ものの見方、感じ方、考え方を豊かにすること。

ここには、学習の過程を一層明確にするため、題材を選ぶ、構成や展開を工夫する、的確に記述する、書いた文章を推敲したり、交流したりすることが示されている。

学習の過程を踏まえて短歌を創作するために工夫する点は、次のア～エのように考えられる。

題材選定・取材・表現の工夫	ア 何を、だれに向かって、何のために短歌として表現するのかを考える。題材は、日常生活や社会生活の中の物事や体験などから得たことについて、取捨選択して決定する。自分の短歌にふさわしいのが口語か文語か、常体か敬体か、和語か漢語かなどを工夫する。
構成	イ 伝えたい事柄をどのように展開したのが明確になるように五・七・五・七・七のつながりを考える。また、句切れを用いるか句切れなしの構成にするかということも工夫する。
記述	ウ 人物・情景・心情などを読み手が言葉を通してありありと想像できるように描く。そのために、比喩をはじめとして掛詞や縁語などの表現技法を工夫する。

推敲・交流・評価	エ 優れた短歌や、自ら及び他の生徒の創作した短歌について自己評価や相互評価をして、表現に役立てるようにさせるとともに、ものの見方、感じ方、考え方を豊かにすることへと発展させるように工夫する。
----------	---

このように、日常生活や社会生活の中での物事や体験をとらえて題材を選ばせ、思考、想像、構想させたことを表現させて、ものの見方、感じ方、考え方を豊かにさせることが大切だと考える。

このア～エを踏まえた短歌創作の単元の実践例について次に述べる。

3 短歌創作の単元の実践例

(1) 「読むこと」の単元との関連付け

年間指導計画において、短歌創作の単元の前に、古典の和歌（三大集）を教材にした「読むこと」の単元を位置付けた。その単元には、短歌を創作する言語活動につなげることを意識して、和歌からイメージしたことを200字程度の文章にま

とめる言語活動を取り入れた。その活動による作品の例を次に示す。

<p>君がため春の野に出でて若菜つむ わが衣手に雪はふりつつ（古今集・光孝天皇）</p> <p>↓</p> <p>私がどれほどあなたのことを思っているか、あなたにはお分かりにならないかもしれませんね。私は純粋にあなたの幸せを願っています。今、私は、あなたに贈る若菜を春の野で摘んでいます。この春の七草は、必ずやあなたを災いからお守りすることでしょう。私がこんなに祈りを込めているのですから。</p> <p>春なのに雪が降ってきます。私の袖に降りかかっています。まだまだ寒さは続くのでしょうか。けれども、あなたを思う私の心には、幸せが満ちてきました。</p>
--

このような活動を行うことで、情景を思い浮かべながら言語文化としての和歌を読むことができ、若菜を摘む古人の思いに対する共感を深められると考える。

(2) 「書くこと」における短歌創作の単元

和歌を教材とした「読むこと」の単元と関連付けて年間計画に位置付けられた、短歌創作の単元の実践例を次に挙げる。

1	科目（対象学年） 国語総合（第1学年）		
2	単元名 「日本で最も新しい歌集を編もう」（3月実施）		
3	単元の目標 (1) 短歌を伝統的な言語文化として受容し創作する態度を養う。（関心・意欲・態度） (2) 学習過程の各段階のねらいに即して短歌を創作する力をはぐくむ。（書く能力） (3) 短歌の定型・句切れ・表現の技法の理解を深める。（知識・理解）		
4	単元を貫く言語活動 「短歌を創作する」		
5	単元の計画（5時間扱い）		
	学習過程（時間）	学習内容	言語活動
導 入	・ 短歌創作における学習課題をつかむ。 （0.5時間）	・ 短歌創作の意義を考える。 ・ 学習課題を設定する。 1学年の最後にクラスの歌集を編集する	・ これまでに学習したことについて発表し合う。
展 開	ア 創作する短歌の題材選定・取材を行い、表現の工夫を考える。 （0.5時間）	・ 自分の身の回りの出来事や体験などから思いつく限り題材を挙げる。 ・ 題材を一つに絞り、それにふさわしい表現について考える。	・ ブレインストーミングをする。
	イ 短歌の構成を考える。 （1時間）	・ 自分が選んだ曲の歌詞を短歌に書き換える。自分のつくりたい短歌の内容について、五七調か七五調か、句切れを用いるか用いないかなどを考える。	・ 歌詞を短歌に書き換える。
	ウ 短歌を記述する。 （1時間）	・ 自分の創作したい短歌の内容について200字程度で作文を書き、それを基に短歌を創作する。	・ 作文を基に短歌を創作する。
	エ 短歌を交流して評価し、推敲する。 （1時間）	・ 歌会を通して、相互に短歌を読んで評価し、さらに推敲する。 ・ 自分の短歌の部立てを決める。	・ 歌会を開く。
終 末	・ 歌集をつくり学習を振り返る。 （1時間）	・ 部立てに分けて編集した歌集に、歌集名を付け、あとがきを書く。	・ 歌集を編集し、あとがきを書く。

本実践例の短歌創作に関する言語活動を具体化するための工夫は、「短歌を創作する」という単元全体を貫き学習課題を解決する言語活動を設定し、学習過程の各段階には単元を貫く言語活動を支える言語活動を位置付けていることである。

単元の導入は、「短歌創作における学習課題をつかむ」段階である。本実践例では、「1学年の最後にクラスの歌集を編集する」という学習課題を設定している。この段階では、これまでに学習したことを発表し合うといった言語活動がふさわしいと考えられる。

単元の展開においては、ア～エを踏まえた各段階を、次のように設けてある。

「創作する短歌の題材選定・取材を行い、表現の工夫を考える」段階では、一年間の出来事や体験などから題材を選んで中心的な言葉を決めるために、ブレーンストーミングを行っている。思考を広げた上で整理させる言語活動である。

「短歌の構成を考える」段階には、短歌の構成についての知識を活用させるために、曲の歌詞（現代語）を短歌に書き換えるという言語活動を取り入れている。例えば、「虹」（尾崎豊）の歌詞を、「銀色の雨に思ふは君ばかり灰色の空晴るるを待ちて」と書き換える過程で、三句切れで上の句と下の句を対比的に構成できることを実感させることができる。この歌は「思ふは君ばかり」が中心の言葉であり、そこで切れを用いている。生徒たちに、どのような言葉を用いて、何句切れ

にして、どのように構成を考えて表現するかなど思考させる活動となっている。

「短歌を記述する」段階には、自分の作文を短歌に書き換える言語活動を設けている。作品の例を次に示す。

春になりました。桜の花が美しく咲き始めています。うららかな季節の中で、なんとなくさびしいのは、もうすぐクラス替えがあるからでしょうか。降っていた雨が上がりました。水たまりには、花びらがどこに行きようもなく浮いています。そのとき、はっと気が付きました。その花びらを浮かべた水面には空が映っています。まるで、空は未来へと広がっているようです。私たちもそれぞれ未来に進むのですね。

↓

雨上がり花びら浮かぶ水たまり
桜の色の空の広がり

「花びら浮かぶ水たまり」が短歌の中心の言葉で、三句切れの七五調で創作している。初句末・第三句末・第五句末の「り」で調子を整える工夫も見られる。

「短歌を交流して評価し、推敲する」段階では、歌会を開く言語活動によって、短歌を相互評価して推敲している。

単元の終末の段階では、部立てに分けて編集し、あとがきを記して歌集をつくる活動によって、学習を振り返っている。

短歌を創作する単元では、単元を貫く言語活動を設定して、目的意識をもって学習課題を解決させるように工夫するとともに、学習過程の各段階の言語活動に主体的に取り組みせ、生活の中の言語文化としての短歌に触れさせることが大切だと考える。

【参考文献】

文部科学省『小学校学習指導要領解説 国語編』
平成20年8月 東洋館出版社
文部科学省『中学校学習指導要領解説 国語編』
平成20年9月 東洋館出版社
文部科学省『高等学校学習指導要領解説 国語編』
平成22年6月 教育出版

（教科教育研修課）